イギリスの「復活」をもたらす二枚腰のしたたかさ

サッチャー政権以来、経済的に復活を遂げたイギリス。なぜこれほど短期間に復活したのか。それは文化や人々の生活にはどのような影響を与えているのか。イギリスの強さの秘密、メンタリティの背景などを、在英経験の長い3氏に語っていただいた。

黒岩 徹（くろいわ とおる）
東洋英和女学院大学教授

小林章夫（こばやし あきお）
上智大学教授

新井潤美（あらい めぐみ）
中央大学法学部教授

サッチャー政権下の1986年、それまでの大ロンドン市は廃止。権限が分割されていたが、2000年に大ロンドン市が新たに復活。市庁舎はノーマン・フォスターの建築により、02年に完成した（中央）。左に見えるのはテムズ川にかかるロンドン橋　写真提供：dpa/PANA

英国　グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国

面積：24.3万平方キロで日本の約3分の2／首都：ロンドン／人口：約6097万人（2007年）／言語：英語のほか、ウェールズ語、ゲール語など／宗教：英国国教など／経済：実質GDPは2兆4986億ドル（2007年）

日本外務省のホームページなどをもとに作成

「ロンドンは美食の町である」と『ル・モンド』紙は賞賛した

小林　黒岩さんは、イギリスの「復活」を目の当たりになさっていますね。

黒岩　私はイギリスに合計16年ほどいました。最初は1970～72年に学生としてオックスフォード大学の大学院へ、75～82年に新聞社のロンドン特派員として、それから89～95年にはロンドン支局長として、サッチャー政権の誕生と崩壊に居合わせました。

　確かにサッチャー以来、イギリスはかなり復活した感じがあります。この

くろいわ とおる●東京大学法学部卒業。毎日新聞社入社。ロンドン特派員、ワシントン特派員、欧州総局長ロンドン支局長、本社編集委員を歴任。日本記者クラブ賞受賞。2001年、大英名誉勲章OBEを受章。著書に『豊かなイギリス人』『イギリス人式人生』ほか

こばやし あきお●上智大学大学院文学研究科修了。専攻はイギリス文学。著書に『イギリス王室物語』『イギリス名宰相物語』『イギリスの詩を読んでみよう』など、訳書に『とびきり哀しいスコットランド史』『クマのプーさん』を英語で読み直す』などがある

あらい めぐみ●日本、香港、イギリス、オランダで教育を受ける。東京大学大学院博士課程満期退学。専攻はイギリス文学、比較文化。著書に『階級にとりつかれた人々 英国ミドル・クラスの生活と意見』『不機嫌なメアリー・ポピンズ イギリス小説と映画から読む「階級」』ほか

十数年を考えると、食文化の変化が最初に思い浮かびます。あの高級百貨店のハロッズで寿司が食べられるなんて、考えられないことでした。ロンドンの日本料理店を数えてみたら、100軒以上もあります。また最近では、パブでタイ料理を出すのが流行っています。そうした食のバラエティですね。

小林 パブでは一時期インド料理が流行っていたのが、タイ料理に変わりましたね。また、和食でも「WAGAMAMA」というラーメンチェーン店が流行っていますが、やっているのは中国人だったり。

黒岩 従業員は中国人、韓国人、インド人のようです。そして、もう一つの変化は「コンラン・レストラン」に代表される最近のインターナショナル・キュイジーヌ、シェフたちがつくり出す新しい料理ですね。『ル・モンド』紙が「ロンドンは美食の町である」なんて賞賛したくらい（笑）、実験的なことをやっている。そういう意味では、食に対して保守的だったイギリス人が変わってきている。

小林 昔、イギリス人は「食に絶望した民族」と言われていましたね。

新井 私がイギリスで中学校に通っていた1975年ごろですが、ロンドンの友だちは日本人が生の魚を食べると聞いて、鱗ごと魚を食べているものだと思っていたようです。それが今、ロンドンには回転寿司が当たり前にあって、お箸を使って寿司を食べられないのは田舎者。しかも、その回転寿司がおしゃれなんですね。ロンドンの日本料理店「NOBU」などは、すごく高級なレストランとして知られています。どこでも食生活はある程度、変化するものだと思いますが、イギリスの場合、それがあっという間に変わったという感じがします。

まともなものが買えない時代から何でも揃う時代になった

小林 新井さんは幼いときから、海外で生活されていますが、イギリスに初めて行ったのはいつですか。

新井 1972年、12歳のころです。セカンダリー・スクール（中等教育）に通い、寄宿学校にも入りました。イギリスの前は香港でブリティッシュ・スクールに通い、そこにはイギリス人がいたし、イギリス英語も習いました。高校のとき、地方都市からロンドンに移って、都心の学校に行ったんですが、イギリス自体の変化はそんなに感じませんでした。

日本へ帰った79年に、サッチャー政権になりました。実はイギリスの大学と日本のICU国際基督教大学の両方に受かっていて、イギリスの大学へ進もうとICUに断りがてら、夏に日本へ里帰りしたのですが、日本は太陽が照っている、どんな国の食べ物も食べられる、店はきれいで従業員がみんな親切だ、テレビはたくさんチャンネルがある。それに比べると、イギリスはまるで暗黒時代みたいな感じでした（笑）。そこで、「私、日本人だし、ここにいる」と。

ところが、私が日本に帰っている間に、イギリスが変わりはじめ、両親がいるイギリスへ休暇で帰るたびに、その変化を感じていました。

小林 私は79年から2年、ブリストル大学大学院にいました。首相がサッチャーに交代するころで、一番悲惨なときでした。家内は、「スーパーへ行っても、ろくなものがない」とこぼしていました。例えば、ミンチを買っても臭くて食べられない。そこで、ランプステーキ用の肉を買ってきて、ミンストビーフにして食べたこともありました。

ロンドン中心部の日本食レストランでは2007年7月から朝がゆが登場。鮭、だし巻き卵、梅干しがともに出される

写真提供：共同通信社
（14、15、19ページも）

その後、２００２年にノーフォークのノーリッジにあるセインズベリー日本芸術研究所に1年間滞在したんですが、ずいぶん変わっていました。まともなものが買えない時代から、何でも揃う時代になった。その後も行くたびに便利になって、楽になっていきました。

黒岩　かつてはサービスをほとんど考えなかったのが、次第に競争原理が出てきた。それに一番早く目覚めたのはロンドン市内ですね。それがだんだん地方に浸透していった。

だけど、パブのよさや人の対応の仕方など、まったく変わらない部分もあります。イギリス社会は、常に先へ走っている部分と、非常に保守的な部分とがありますね。

外国文化との接触、競争原理、富裕層の登場が変化を加速した

小林　サッチャー時代以降、イギリスは急激に変わったわけですが、どうしてこんなに速く変わったのでしょうね。

新井　経済的な変化は大きいでしょう。それと、海外の情報が入ってくるようになった。私がイギリスにいたころ、友だちは海外にほとんど興味を示しませんでした。せいぜいアメリカからドラマが入ってくるぐらいで、子ども心にもイギリスだけで完結した感じがありました。それが海外のことに興味を持ち、インターネットで情報が簡単に入るようになると、さすがにこうはしておれないという自覚が起きてきた。

小林　ＥＵの存在もありますね。イギリスがどこまでＥＵ統合に参加するのかという問題はありますが、私が行くたびに思うのは、ＥＵも含め、かつての植民地からいろんな食べ物や飲み物が入ってきている。それだけバラエティに富んだものが手に入るようになって、人々もコスモポリタン的になっているように感じます。

新井　そうですね。昔は入ってきても受けつけなくて、ガーリックさえ嫌だという感じでした。

黒岩　変化の理由は3つあると思うんです。まず、海外との接触が増えたこと。外からの投資も入ってくるし、「ウィンブルドン現象」といわれるように、どんどん外国人が入ってくる。そして、サッチャー政権以降、イギリス人が外に出て行く機会が多くなり、外国文化との接触が増えたことですね。

２つ目は、サッチャー政権以来の競争原理。店がうまくいかないとつぶれていく。今までは同じパブを何十年もやっていればよかった。ところが、それでは人が集まらなくなってきた。パブでタイ料理を出すようになり、子どもが入れるスペースをつくってみたりと、いろいろな工夫が出てきた。

そして、人々が裕福になり、ニューリッチ、あるいはＤＩＮＫＳ（共働きで子どもがいない夫婦）など、お金を使える層が出てきた。その3つが原因じゃないかなと思います。

小林　そういう意味では、食の変化は画期的だったと言えるわけですね。

黒岩　私が若いころは、イギリスはそう簡単には変わらないというのが、肌で感じたことで、それがまたよかった（笑）。それがそうでもなくなってきたようです。

サッチャー改革で経済復興する一方、古きよきイギリスが失われた

小林　サッチャーが行なった改革には、いい面と悪い面の両方がありますね。イギリスは経済的によくなった。その一方で、イギリスが本来持っていたよい部

分をつぶしたという批判があります。

黒岩 学者たちはサッチャーに対して、ものすごく批判していますね。オックスフォード大学出身の首相ならもらえるはずの名誉法学博士号を、サッチャーは大学から授与してもらえませんでした。サッチャーは大学評価の方法を変え、業績に応じて基金を交付するようにしたのですが、それに対して、学問に競争原理を入れるとは何事かという反発が起きた。アカデミズムにはイギリスが本来持っているよいものをサッチャーが壊したという反発が強かったと思います。

新井 私の知人にはアカデミックな人間が多いのですが、みなさんサッチャーが大嫌いでした。

例えば、19世紀後半に始まったサヴォイ・オペラですが、ギルバート&サリバンの興行師をしていたドイリー・カートがつくったドイリー・カート・オペラ・カンパニーは、サッチャー時代に芸術関係の支援が打ち切られ、一度つぶれてしまいました。サヴォイ・オペラのファンは、「サッチャーにつぶされた」と言っています。コヴェントガーデンのロイヤルオペラハウスのように、イギリスの伝統的でハイブラウな国際的にも評価されているものは存続していますが、ミドルブラウの伝統的なものが競争に勝てないで消えていくのは、非常に大きな損失だという声がありますね。

その一方で、銀行に勤めている父の同僚は「サッチャーがいないと私たちの生活はどうなっただろう」という感じでした。

親の世代は芸術に価値を見いだし若い世代はトレーダーに憧れる

小林 ブレア首相の時代ですが、私がイギリスで暮らしていた02年はバブルの時期で、前年に比べると家の値段が2割ぐらい上がっていました。かつては家を探すとき、不動産屋さんがとても紳士的に応対してくれたけど、02年になると不動産屋さんが悪辣なことをやる。それでトラブルになる日本人がたくさんいました。経済がよくなるのはよい反面、経済一辺倒になって、かつてのイギリス人のよさがなくなりつつある。

新井 父の経験でいうと、銀行業界でもマーチャントバンク（投資銀行）と一般の銀行とでは、明らかに質が異なると言っていました。マーチャントバンクが次第に力をつけ、その分、あこぎなことをする人が増えてきたようだと。

サッチャー元首相の銅像が完成。下院議場に隣接する議員ロビーで除幕式が行なわれた（2007年2月21日）。鉄の女と呼ばれた元首相は、「鉄の像のほうがよかった。でも、銅像もいい。錆びないから」とジョークを飛ばした

写真提供：AFP＝時事（20ページも）

ロンドンのエネルギー取引企業のトレーダー。イギリスはいち早く金融自由化を行なったことが、復活の一因にもなった。現在では日米に先駆けて、温室効果ガス排出権取引なども盛んに行なわれている。2007年

黒岩　現在のイギリスで新たな格差ができたのは、それだと思うんですね。オックスフォードで教師をしている友人の息子が、ケンブリッジの数学科を首席で出たあと、トレーダーになった。両親は「金まみれになるんだったら、乞食のほうがまだいい」なんて怒っていた。

　結局、トレーダーで大儲けして、自分の飛行機を持ち、ときどきフランスへランチに行こうと言って両親を飛行機に乗せるほどになって、32歳で引退した。両親はいまだに嘆いています。そういう人生に何の価値があるのか、本来人間の生きる価値は金ではない、もっと別な価値があるんだと。イギリスの伝統だと、それは芸術などですね。両親は実際、おじの遺産をもらっても、レンブラントやシャガールなどの版画の収集にすべて費やしている。

　一方、息子の生き方は、今の若者の憧れです。そういう意味ではイギリス社会そのものが二極化しているところもある。その変化の原動力になったのは、やはりお金であり、アメリカ的な資本主義ですね。

　サッチャーがやった改革は、かなり荒っぽかった。イギリス人にとって競争原理は異質なものでした。競争しないで、それぞれの良さを生かすのがイギリス人だった。

　サッチャーという政治が趣味だという異質な政治家が国を変えねばならないほど、イギリスは経済的に疲弊していたということですね。

古いものを守るのと同時に新奇さを許す寛容の精神がある

小林　よく言われるのは、あれだけ保守的に見える国でありながら、ビートルズやミニスカートなど、新しいものが出てくるのはなぜか、ということですね。僕が説明するときは、例えば、周りのことをあまり気にしない連中が多いから、逆に言うと、突拍子もない格好や音楽が出てきても、別に抵抗がないんだ、と言っているのですが、どうなんでしょうか。

新井　イギリス人は何でも文句をつけたがる傾向がありますね。また学校時代の話になりますが、英文学や国語の授業を取っていると、まず誰かが発言したら、その反対を考えるという習慣がついてしまうんです。だから、日本に帰ってくると、「お前はすぐに反対する」「ああ言えばこうだ」なんて、怒られる。批判する精神というと格好がよすぎますが、クリシェ、何か固まったものに対して、文句をつけたくなるメンタリティがあります。

小林　何かいちゃもんをつけたいと。

新井　そう。それを才能がある人がやると新しいものが生まれるという感じもするんですね。

黒岩　「curious」という言葉がありますね。日本では「奇妙な（人）」といった軽蔑のニュアンスを含んでいますが、イギリスで「彼はあらゆることにcuriousだ」というと、プラスの評価です。他人と違うおもしろい発想をする人を大切にします。

小林　だから、奇人が好きなんですね（笑）。

黒岩　チャールズ皇太子が以前、古い建物を守れと訴えましたね。ナットウェスト（ナショナル・ウェストミンスター銀行）の建物はひどいなど、さんざん言いましたけど、そのとき反論のなかに、「チャールズが守ろうとしている建物は19世紀当時、非常にcuriousな建物で、当時は批判を受けた。だけど、批判されるものは常に新しいものであって、その批判はあって然るべきだ」というのがありました。そこには、「古いものを守れ」というのと同時に、変な新しいものも許すべきだという寛容の精神があ

移民が多く住むロンドン北東部のニューベリーパーク小学校の子どもたち。文化の多様性の維持と向上は政府の重要な政策になっている

る。それは他人と違うことが素晴らしいという、イギリス人の考え方から来たんじゃないかという気がします。

小林 新井さんは向こうで教育を受けられて、そういう部分は感じましたか。

新井 一人ひとりが勝手なことを言うのはイギリスだと心地よい（comfortable）ことなんですね。例えば、中学校になると一人ひとりを特徴づけるんです。この人は馬が大好きで馬の話しかしない、この人はロマンス小説が好きと、特徴があることが当たり前。エキセントリックな部分をわざと出しているところがあって、それがアイデンティティになる。

もちろん、別にそれがなくてもいいわけです。そういう自由というか、他人と違うことが当然だけど、「あなたは何が個性なの?」と言われるわけでもない。他人との付き合いにおいて、そのへんがすごく楽ですね。

小林 エキセントリックがいいんですね。それがエゴセントリック（自己中心）になるとまずい。

イギリスのユーモアはもともとグロテスクでしつこい

小林 イギリスのテレビでは、アメリカだったら絶対できないような、すごいジョークをやるでしょう。しかも、それがBBCの番組だったりする（笑）。

新井 ぎりぎりの表現まで行きますよね。ポリティカリー・コレクト（政治的に正しい言葉づかい）が普及してくると、あえてそれに刃向おうとする。差別をしている、してないの問題じゃなくて、本当に悪趣味のぎりぎりのところまで行って、開き直ったり、突っついたりする。

黒岩 それは言論の自由とも関係してくると思います。イギリスの新聞のマンガなどを見ていると、例えば、チャールズ皇太子がギロチンで首を切られていたり、エリザベス女王がフィリップ殿下とベッドに入ってしゃべっていたり。劇でも女王役が出てきて、一家を散々風刺したりする。

表現にタブーが少ないというか、やはりイギリスにはシェークスピア以来の伝統が生きている。シェークスピアの言葉なんて、もうメチャクチャに汚い言葉を使っているでしょう。あれを許す土壌というのは、イギリスは言葉で生きている国だからだという感じがしますね。

新井 以前、『アブソリュートリー・ファビュラス』というコメディドラマがあって、ビデオを持っていたので、アメリカ人の同僚に貸したんです。

主人公は太った女性ですが、一つのエピソードでは、昔の知り合いの女性が10年ぶりで訪ねてくるという。知り合いは痩せていて、かつて主人公は太っていることをバカにされたことがある。そこでその知り合いが来るまでにと、ダイエットをする。

結局、ダイエットに失敗して、ふてくされて待っていると、その知り合いの女性の親友が「安心して大丈夫よ」と言う。「彼女も太ったの?」「いや、そうじゃないのよ。彼女、目が見えな

BBC制作のテレビ番組『モンティ・パイソン』シリーズは、いかにも英国らしい強烈なギャグで人気を博し、コメディの歴史に新しいページを書き加えた。日本でも単行本が出るなど、現在でも熱狂的なファンを持つ（上）。下はテレビの人気を受けてつくられた映画『モンティ・パイソン・アンド・ナウ』（1971年）の1シーン

くなったのよ」。アメリカ人の同僚は、このビデオを見て仰天して、「とてもアメリカじゃ、無理だ」（笑）。

言葉のぎりぎりのところでブラックユーモアを追っていく。もともとイギリスのユーモアは相当グロテスクで、しつこさもあります。

小林　『モンティ・パイソン』のシリーズに出ていたピーター・クックが亡くなって、この間、バイオグラフィーが出たんです。それを読んでいたら、彼が小シアターでやっていたジョークが載っていて、「これはやばいな」というものがいっぱいある。それを許す風土は、懐が広いなと感じます。

辛辣な質問にジョークを返せない政治家は評価されない

黒岩　確かにイギリス人は言葉に対して寛容ですね。政治家に対しても、ものすごく辛辣なことを言う。先日の福田首相の辞任発表の記者会見で、記者の質問に対して、福田首相が捨て台詞を吐いたでしょう。イギリスだと、質問に対してカッとなったり、パニックになったりというのは、政治家としては失格なわけです。政治において会話は一つのゲームだし、言葉を楽しむ余裕があると思う。ジャーナリストとして、イギリスの政治家の懐の深さはそういうところに感じます。ただ、例外はサッチャーで、少しカッとなったりね。そういう意味でも、異質な政治家でしたけれど。

小林　それを考えると、ブレア以後はおもしろい人がいなくなった感じはありませんか。このところ支持率がずいぶん下がって危ないと言われている、ゴードン・ブラウン首相もあまりおもしろくないですね。

黒岩　イギリスの政治家でジョークをパッと言えない人はあまり評価されませんが、ブラウン首相はそこが下手なんですね。

イギリス人のフレキシビリティには二枚腰のしたたかさがある

小林　そういう部分では、打たれ強いというか、少々のことではへこたれないところがありますね。

黒岩　それは言葉だけじゃなくて、行動にもあると思うんです。例えば、この間、消防署のストがあったでしょう。あのときに第二次世界大戦時代の消防車が出てきた。それから、地下鉄が故障するとすぐにシャトルバスを出す。それもこの前は故障の期間があまりに長かったので、スコットランドからバスがやってきた（笑）。

いい加減さというのがイギリス人の

スコットランド議会（エジンバラ）での党首討論のもよう（2006年）。1707年にグレートブリテン王国が設立して以来、閉鎖されていた議会は、1998年に制定されたスコットランド法により、1999年から再開された。英国ではスコットランドとウェールズへの権限委譲による地方分権化の模索が現在も続いている

写真提供：PANA

一つの体質みたいになっている。プランAだけでなく、必ずプランBもある。日本人はAと決めたら完璧にやろうとする反面、それがだめだととたんにパニックになる。ところがイギリス人は次はどうしようかと、つまりいい加減さのなかに、次にフォローできるものを考えている。こういう二枚腰的なところがイギリス人の体質にある。

小林　いい意味でのフレキシビリティですね。60～70年代はひどい状態で、76年にはポンド危機でＩＭＦから緊急融資を受けた。そんな時代でも乗り切ります。経済的に落ち込んでも「何とかなる」という部分はやはり強い。

黒岩　印象的だったのは、05年の「7・7事件」と言われるロンドン同時爆破テロ事件です。日本の記者は「あれだけの事件があったにもかかわらず、パブは平常です」と報道した。血を流している人がインタビューにも答えている。あれがアメリカだったら、泣き叫ぶところです。

労働者階級にも誇るべき文化があり上流階級にもよき伝統がある

小林　日本人にもう一つよくわからないのが階級の問題ですね。階級の違いは消えつつあるものの、まだイギリスの中に隠然と存在しています。

新井　それぞれの階級が文化になっていて、上昇志向や収入とは関係ない部分があります。昔なら、労働者階級の人は貧乏と言えましたが、今は必ずしもそうではない。ワインよりビールのほうが好きといった労働者階級の文化があって、現に私の同僚も大学の先生をしているけれど、ロアー・ミドルクラスで、労働者階級の出だということにプライドを持っている。

　それに楽というのもあると思う。アメリカや日本みたいな、スノビッシュな、変な上昇志向がないのはいいところですね。

黒岩　労働者階級と中産階級を比較すると、社会のステータスを少しでも上げようという意欲を持った者が中産階級だと言われますが、そういう人は確かに増えていきます。

　だけど、イギリスの上流階級の人たちは、ノブレス・オブリージュ（高貴な義務）とまでは言わなくても、お金持ちならボランティア活動や寄附をするべきだといった意識を持っている。単にお金さえ儲かればいいというものではない。ただし、それは下からすると、非常に嫌らしく見えるかもしれませんが、最良の部分ではそれなりの素晴らしいものがまだ残っています。

ダイアナ妃の死去のときに初めて人前で泣くイギリス人を見た

小林　ダイアナ妃が亡くなったとき、ちょうどイギリスにいましたが、人前で泣く人たちを見るのは初めてでした。

新井　私も驚きました。あのときは私もイギリスにいて、テレビを観たあと、ケンジントン宮殿へ行ってみました。まったく面識のない人たちが献花をし、泣き崩れているのを見たときは、一体どうなったのかと思いました。

　事故が起こる前日には、ダイアナ妃が対人地雷の廃止に対する政府の対応を批判し、タブロイド紙に「ダイアナ黙れ」と書かれ、大きな顔写真の口のところにジッパーが描かれていました。ところが、事故で亡くなったら、ダイアナ妃はとたんに聖女になった。

小林　辛口ジャーナリストのパックスマンが、『The English』のなかで書いています。かつては上唇をギュッと噛みしめるのがイギリス人だった。それがこんなふうになるのは一体なんなのかと言うのです。ダイアナ妃の死は、

ダイアナ妃の没後10年の2007年8月31日、ケンジントン宮殿のフェンスには妃を偲んで、写真や花束が並べられた
写真提供：Daniel Berehulak/Getty Images

イギリス人の印象をものすごく変えた。

黒岩　私もいろんな人に話を聞いてみました。例えば、彼女が弱いものの味方だったと。泣いた人は弱者の立場の人たちが多かったという。だけど、いろんな説明のなかで、もっとも納得できたのは、彼女は世界最高のカバーガール（表紙の女）だったというものです。彼女を新聞のトップに載せると部数が伸びる。「Diana's Lover」なんて書くと、もう30万部も40万部も伸びる。安易なジャーナリズムが、テレビも含めてあった。それだけダイアナ妃は常に人々の身近にいたわけですね。だから、自分の兄弟や親に近い、親しい存在だった。それが突然消えたときの喪失感が涙となったのではないかと、ある社会学者が言っていました。

戦後イギリスの人々の心には常にエリザベス女王がいた

新井　エリザベス女王も国民の中に本当に入り込んでいるから、もし彼女が亡くなると、国民は相当ショックを受けると思いますね。

小林　かつてビクトリア女王は在位64年で亡くなりましたが、王としてビクトリアしか知らない人たちの喪失感は非常に大きかった。私がイギリスにいた02年にはエリザベス女王在位50周年を祝っていましたが、もしエリザベス女王が亡くなられたら、喪失感は大きいでしょうね。

新井　ロンドン・オリンピック開催の２０１２年にダイヤモンド・ジュビリー（在位60周年）になりますね。

小林　女性が長寿の家系ですから、もしかするとチャールズ皇太子は国王になれないかもしれない。

黒岩　あり得ます。母は１０２歳、祖母は96歳まで生きました。ダイアナ妃が亡くなったときは、「次のウィリアム王子に譲れ」という声が多かった。最近はチャールズ皇太子がカミラと結婚してうまくやっているので、そういう声は少なくなりましたが、実際、エリザベス女王に対する尊敬心から、彼女に頑張ってもらいたいという気持ちも強いでしょうね。

新井　そうですね。戦後のイギリスにはずっと彼女がいた。その間に王室は少しずつ開かれて、映像を撮らせたり、テレビに出てみたり、家庭的なところを示したりもした。

奈良の東大寺を訪問したチャールズ皇太子とカミラ夫人（2008年10月29日）。皇太子夫妻は10月27～31日、日本に滞在し、東京、奈良、長野を訪れた
写真提供：時事通信社

イギリスの大衆紙は王室のゴシップを好んでよく取り上げる。報道の過熱は負の部分も大きいが、市民に王室への親近感が生まれる一助ともなっている。写真は、ウィリアム王子の破局にはエリザベス女王の意向があったと報じた2007年4月15日付『ニューズ・オブ・ザ・ワールド』

黒岩　エリザベス女王は、王室が変わらないといけないことをよく理解しています。王室を維持するには国民の支持が必要で、国民も自分たちの王室を税金で支えているという気持ちが強い。女王はそれを鋭く感じている。非常に賢い人だと思います。

多様な文化を受け入れる知恵は大英帝国のよき遺産なのか

小林　それにしても、ロンドンに行けばいろんな人種の人たちがいて、それがイギリスの強さになっている。いろんなものを受け入れ、人種間の対立が表面にはあまり出てこないのは、大英帝国のよき遺産なのかなと思います。

黒岩　イギリスは植民地主義の時代に間接統治をして、植民地の文化を尊重した。それと同じ考え方が、いまのイギリスにもあるのかもしれません。イギリスには、現在、ポーランド人、それから中国人、インド人が大勢入ってきています。全寮制の私立校の7万人のうち、中国人が9000人ほど入っているそうです。お金もあるということで、それを許している。

「7・7事件」後も、アメリカのようにアラブ人と見れば捕まえたり、差別したりということはなく、「テロリストが生まれないように、地域に寺院が必要ではないか」と、コミュニティでの運動が出てきている。そういう意味では、イギリスには多民族に対する寛容さはある。それこそかつて多民族を歴史的に支配してきた知恵じゃないかとも思います。

小林　悪い見方をすると、それだけ悪知恵が働く（笑）。ただ実際、今ロンドンへ行くと、イギリス本来のものはあるのかと思うぐらい多文化になっています。

新井　そうですね。行くたびに昔のイギリスの文化が変わっていく。それを見ると、ちょっと寂しい感じもします。私が外から見てもそんなことを思うんだから、イギリスの年配の方は一層そうじゃないか。にもかかわらず、それを受け入れているところはすごいと思いますね。

黒岩　「ウィンブルドン現象」はもともとイギリスの体質の中にあるのかもしれませんね。

英国のスポーツはアマチュアリズムとビジネス化のはざまで揺れている

新井　そういう意味では、ロンドン・オリンピックはどうなるんでしょうね。8月ごろに『ガーディアン』紙に世論調査が出ていたのですが、50％ほどの人が興味ない、ロンドンじゃなくてもいいと答えています。意外とみんなクールですね。雑誌の『スペクテイター』はダイヤモンド・ジュビリーのほうが盛り上がる、それのついでとしてオリンピックがあると書いていました。

黒岩　イギリス人はお祭りに対して、冷めたところがあるでしょう。今度の北京オリンピックでも、金メダルの数に興奮するといったことが、イギリス人にはないわけです。

新井　もともとイギリスはアマチュアリズムで、スポーツのために練習するなんて、けしからんという考え方でした。本当はそれが美徳だったわけですが、今は変わってきていますね。

小林　アマチュアリズムで、伝統的には陸上の800mから1600mといった中距離走が強かったんですね。サッカーもウィンブルドン現象で、プレミアリーグのマンチェスター・ユナイテ

マンチェスター・ユナイテッドが欧州チャンピオンズリーグで優勝し、トロフィーを掲げるクリスティアーノ・ロナウド（2008年5月11日）。マンチェスター・ユナイテッドは主力選手の多くを高額の契約料で世界中から集めたスター軍団として知られる

ッドなどは資金で勝負して、世界中から選手を集めてきています。

黒岩　チェルシーのオーナーはロシアの大富豪だし、マンチェスター・シティのオーナーはこの前まで、タイのタクシン前首相だったりしました（笑）。これもウィンブルドン現象の一つですが、スポーツもいざプロとなったら、割り切って、資金は外からでもいいから十分に使って勝負する。これはある意味でイギリス的リアリズムですね。

小林　ただ、今はサブプライム問題でイギリスもかなり影響を受け、それこそバブルが弾けた状態ですね。

黒岩　しかし、イギリスの経済界、金融界には非常にしたたかなところがある。例えば、バークレー銀行は以前、倒産の危機と言われていましたが、すっかり立ち直って、リーマン・ブラザーズの北米の投資銀行部門を買収するという話です。彼らは金融業で生きてきたから、そういう二枚腰的なところがある。

イギリス社会にはいろんな扉がある。開けると親切に応じてくれる

小林　日本人のイギリスとのつきあい方についてはいかがでしょうか。日本人のイギリス人に対する感情はいいほうですね。もちろんイギリスが嫌いな人もいるけれども、「でもイギリスって、いいよね」という人が多い。

新井　もともとの性格も似ている部分があると思います。日本人はよくシャイと言われますが、イギリス人も基本的に自分を表に出すのを嫌う。日本人が共感しやすい部分ですね。

　しかし、あるところからは日本人がついて行けない部分もある。さきほどのいちゃもんつけとかですね。例えば、アネクドート（逸話、小話）というか、気の利いたことを必ず言って、絶対、何かの言葉で締めなきゃいけないという考えがある。そこは日本人とちょっと違う。

　その一方で、私が寄宿学校に入ったとき、最初に言葉では何も教えてくれませんでした。新入生は見よう見真似で、だんだん感づいて自然になかに入って行かなくてはならない。アメリカ人と比べると、感じてくださいというところが強いと思います。

小林　私も79年にブリストル大学大学院へ行ったとき、指導教官が最初に言ったのは、「君のほうから声をかけないとイギリスでは友だちをつくれないよ」ということでした。

黒岩　ある人はこんなことを言っていました。アメリカのパーティは1人で行くと、あの人は寂しいだろうと思って声をかけてくれて輪に入れる。イギリスで1人でいると、あの人は孤独を楽しんでいるというので声をかけてくれない。

小林　なるほど（笑）。

黒岩　また、誰かが言っていましたけども、イギリスの社会にはいろんな扉がある。その扉は自分で開けなくてはならない。開いていくといろんな人を紹介してくれる。だけど、いくつも扉があるのだ、と。まさに言わなきゃ応えてこないということですが、応えるとなるととても親切ですね。

イギリスは日本にとって教師でもあり、反面教師でもある

黒岩　それだからか、イギリスに短期間しか行かない人は拒否反応を示して帰ってくるケースがありますね。1年、2年と長くいた人はみんなイギリスが好きになって帰ってくる。

小林　私の大学でもイギリスに海外留学すると、うまくいく学生と拒否反応を示す学生とに二分されますね。

新井　あと、天気で参っちゃう人がいますね。気が滅入ってしょうがないって。

黒岩　秋に行った人は憂鬱になるという。夏目漱石もそうじゃないですか。

小林　漱石は留学1年目はよかったんですね。ミュージックホールへ行ったり、芝居見に行ったり。ところが1年経って、文部省に研究の報告書を出すところで、ちゃんとやらなきゃと思った途端におかしくなった。江藤淳さんは漱石のロンドン時代は暗黒のように書くけれど、必ずしもそうじゃなかった。遊んでいればよかったんでしょうけれど、漱石も真面目な人だから（笑）。

黒岩　僕の先生が言うには、海外に行った日本人には、極端なタイプが二つあると。一つは「いかれインターナショナリズム」で、現地のものはすべてがよくなってしまう。もう一つは「力みナショナリスト」、つまり「俺は日本人だ」と。長谷川如是閑が著書『倫敦！倫敦？』で、「日本人として、俺は大股で歩いた」とか書いている（笑）。どちらも相手からは尊敬されないでしょうね。

小林　そうですね。今年は「日英交流150周年」ですが、イギリスは日本にとっていろんな意味でモデル、あるいは手本になっている気がします。自然保護運動のナショナル・トラストもそうですが、日本はイギリスの跡を追いかけているようなところもある。我々にとってイギリスは、ある意味では教師でもあり、場合によっては反面教師でもある。そんな感じでつき合っていければいいかなと思っています。

（2008年9月24日、東京四谷のジャパンファウンデーションにて）